

遍路文化を生かした地域人間力育成の取り組み —鳴門教育大学の場合—

Enhancing Local Potential through the Culture of the Shikoku Pilgrimage: In the Case of Naruto University of Education

大 石 雅 章 (鳴門教育大学副学長・教授)
Ōishi Masaaki

In 2001, Naruto University of Education began a project for study of the Shikoku Pilgrimage and in 2005 opened a class that included making the pilgrimage. From 2007, with support from the Ministry of Education, the university initiated a three-year plan for enhancing local potential through education in “consideration for others” and a plan for making the pilgrimage area as a whole a “museum,” involving walking the pilgrimage route. The aim of this project, the enhancement of local potential, was to encourage community members to study local culture, and furthermore, to become able to use it, create with it, and convey it to others. The first specific activity was education through the experience of making the pilgrimage, cultivating consideration for others as an aspect of *jōsōkyōiku* (emotional education) for elementary, junior high, and high school students participating as volunteers. For the second activity, making the pilgrimage a “museum,” investigations were made of cultural assets in order to understand the culture of the pilgrimage, with a focus on writings, road markers, etc., in addition to interviews. The third activity was to convey to others the results of the previous activities. Through education and research activities making use of pilgrimage culture, students and local residents worked in cooperation, contributing to their ability to support local society and culture creatively.

1 鳴門教育大学における取り組み

鳴門教育大学では平成13年度に、地域に根ざした教員養成大学とはどうあるべきかという視点から、将来的には徳島の文化を扱った教養授業「阿波学」の開講を目指して、「四国遍路八十八ヶ所の総合的研究」プロジェクト（以後、四国遍路プロジェクトと略す）を立ち上げました。

教育大学の場合は一愛媛大学の教育学部でも同じだと思いますが各専門分野の教員が1人、2人と少ないですが、しかし、反対に多分野の教員が身近にいることが強みであります。そこで、四国遍路を学際的に研究しようということで、この四国遍路プロジェクトに教育学、歴史学、地理学、社会学、国文学、体育学等の教員が参加し、歴史学の私がプロジェクトの世話を担当することになりました。

そこで、四国遍路を知るためには、研究だけでなく、四国遍路を実際に歩いてみる必要があるだろうとのことで、徳島県内の遍路道を歩き始めました。この体験から、歩き遍路が教育上に効果的であるという見解に達しました。それと並行して学術的な遍路研究も進めました。地域では遍路をどのように受け止めて支えてきたのかなど、歴史学の観点からも、学生とともに研究を進めました。

本学の大学院には、幼・小・中・高の教員が研修で四国外からたくさん来ています。そのような大学院生には「四国に来た限りは四国遍路を歩いてみたい」という思いを持っている人も多く、平成17年度から2泊3日の歩き遍路体験を主体とする大学院授業「四国遍路と地域文化」を立ち上げました。さらに学部においても、平成18年度から「阿波学（四国遍路）」という授業を実施しました。

平成16年度には本学教員と徳島県の小学校教諭からなる「鳴門教育大学 教育と学校を考える会」が、小・中学生を対象にした歩き遍路体験を実施し、学生がボランティアとして参加しました。このように、学術的な研究と併せて、「鳴門教育大学らしい」教育という面を重視した活動を展開することに

なりました。

一つの画期が訪れました。それは文部科学省の現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム（現代G P）、つまり現在の大学教育を活性化させようという文部科学省の企画で、本学からは「遍路文化を活かした地域人間力の育成一歩き遍路による『いたわり』情操教育と遍路地域の『まるごと博物館』構想一」というテーマ（3年計画）で文部科学省に申請致しました。無事この申請が認められ、文部科学省から年間2400万、3年間で7200万の支援金をいただくことになりました。この現代G Pのねらいは、「地域活性化」を核にした大学教育の取組であるため、おのずから私たちも、四国遍路の教育研究が「地域活性化」とどのように関わるのかという点に向き合うことになりました。そこで、地域の輝きとはどういうことかについて検討しました。直ちに頭に浮かぶのは経済的な力ですが、しかしそれよりも重要なことは、地域に個性をもたらす地域文化ではないか。つまり文化を育くみ発展させていくことが地域の輝きにつながるであろうという考えにまとめました。

その地域の輝きを担う力、それを「地域人間力」と定義しました。具体的には、地域文化を学び、知り、さらにそれを活用し、創造し、発信していく力です。引き継いだものをそのまま同じように活用していくは発展がありません。そこにその時代に合った創造を附加して、発信していく。そのような力を「地域人間力」と名付けたのであります。そしてこの「地域人間力」を育むためにどのようなことをすべきかを考えました。

その一つに、歩き遍路体験による教育活動があります。すなわち小学生・中学生・高校生を対象にした『いたわり』情操教育としての活動であり、そこに学生がボランティアとして参加します。児童、生徒にとって教育的意義があるだけでなく、大半が小・中・高の教員を目指す本学の学生にとっても、児童・生徒との関わりは、貴重な経験となります。

もう一つは『まるごと博物館』構想としての活動であります。遍路文化を更に解明していくために文化財調査研究活動があります。その活動の中心は文書や道標などの調査や聞き取り調査であります。そして、3番目はこれらの活動から得られた成果をいかに発信していくかであります。以上の3つを「遍路文化を活かした地域人間力の育成一歩き遍路による『いたわり』情操教育と遍路地域の『まるごと博物館』構想一」の活動の柱としました。

2 遍路文化の基礎的学習（講義授業）

遍路文化の基礎的学習ということで2泊3日の歩き遍路を学生に体験させるのですが、遍路の知識なく歩き遍路に入れると、単なる山歩きになってしまいます。それでは困りますので、遍路文化の基本的なことを知った上で歩き遍路体験授業を行うことにしました。このことは、遍路を歩いている方々に迷惑をかけないといった点からも非常に重要であります。そのため、歩き遍路体験授業の前に5コマから6コマの講義を実施します。私は歴史分野を担当しております。それ以外には地理分野があります。子供たちの歩き遍路を支えるボランティアとして参加するときに地図を読めなければ困ります。実際に5万分の1や2万5千分の1の地形図を持って歩くことになりますので、地理分野の知識が必要となってきます。さらには教育学の分野、心理学の分野、体育学の分野などがあります。体育学の分野では血糖値の問題や疲れの問題、心理の高揚の問題等を扱います。

(1) 空海と四国遍路

私は歴史分野ですので、ここで少しばかり歴史分野からお話をさせていただきます。四国遍路の歴史は、古代・中世の僧侶（修行者）が廻る辺路から民衆が多様な目的で廻る遍路へと変化していったと考えています。そのことは四国遍路と言われながらも、時代と共に変化してきたということと、遍路文化は地域の人々によって創られ、支えられてきたということの2点に力点を置きながら学生に講義します。

まず四国遍路は、弘法大師空海ゆかりの靈場寺院を巡る巡礼であり、各靈場寺院は、お札を納めるところから札所と呼ばれていることを説明します。そして先ほど述べましたように、四国遍路は大きく2期に分かれ、僧侶の修行として巡る四国辺路から世俗の人が多目的で巡る四国遍路へと変化すること、そしてその変化する時期は、戦国期から江戸初期頃だろうと説明します。

次に、空海ゆかりの寺院八十八ヶ所に関して、空海が四国で修業したのは事実ですが、実際に彼がどこで修業したのかということについての記載はほとんどなく、確定することはできません。明確に記載されている所は、弘法大師が24歳のころの著作である『三教指帰』に記載された阿波の大瀧、土佐の室戸などわずかであります。したがって、現在の八十八ヶ寺は『寺伝』に弘法大師との由緒を説きますが、ほとんど史料的に確認できず、信憑性は薄いということになります。鎌倉末期から南北朝期にかけて登場する『弘法大師行状絵巻』には必ず描かれている場所があります。それは虚空蔵求聞持法修得の場面である阿波の大瀧と土佐の室戸です。このように『弘法大師絵巻』の中で描かれる場所に、現在第21番札所大瀧寺、第24番札所最御崎寺があることを指摘して学生に关心を持たせることにします。

空海が修行したのち、僧たちが四国を修行している姿を示す史料が平安時代末に現れます。一つは、後白河上皇が編集した歌謡集『梁塵秘抄』であります。その中には「われらが修行せし様は 忍辱袈裟をば肩に掛け また笈を負ひ 衣はいつとなく潮垂れて 四国の辺地をぞ常に踏む」（『新潮日本古典集成』）という歌が詠まれています。これは平安時代にすでに四国が都人にも知られる修行の場であり、弘法大師空海の修行の地を踏むがごとく僧たちが四国を修行の場として設定し、ひたすら歩んでいたということがわかります。もう一つは、『今昔物語集』という平安末期の説話集であります。そこには、「今昔、仏の道を行ける僧、三人伴なひて、四国の辺地と云は伊予・讃岐・阿波・土佐の海辺の廻也」（『岩波文庫』）というようにはっきり海辺の廻りと記載されています。このように平安時代から四国は修行の地として著名であり、多くの僧たちがそこで修行していたことがわかります。四国はおよそ戦国期ぐらいまでは主として僧が歩く修行の道であったといえます。醍醐寺の僧が自身の資格を得るために四国で修行したことを述べています。したがって四国での修行は僧侶の資格を得るための修行として位置づけられていたようです。四国辺路は僧侶にとって特に真言僧にとって非常に重要な修行がありました。

このように四国遍路は僧の修行の四国辺路として展開していくますが、これが現在のような四国遍路、民衆が廻る四国遍路と大きく変化することになります。このような民衆の遍路はいつから登場してくるのかについて、江戸初期に案内記が刊行されることが注目されます。四国遍路の道中記の『四国遍路日記』（1653年）の著者澄禪は、九州の人であり、京都の智積院に入寺し、四国遍路を廻ることになりました。その時の日記が見つかっています。また刊行された四国遍路ガイドブックとして真念のものは非常に有名であります。『四国辺路道指南』（1687年）というタイトルで、いわば現代のポケットガイドブックのようなもので、長い間利用され、何回も増刷されています。四国遍路寺院の解説書として

は高野山の僧である寂本の『四国遍礼靈場記』（1689年）という7冊にわたる大部なあります。寂本自身は四国へは来ていませんが、真念など聖から得た情報も活用しながら記したといわれています。また、真念は『四国遍礼功德譚』（1690年）という書物も書いております。

このように江戸時代になると四国遍路ガイドブックが刊行されるようになり、その版元はほとんどが大阪でありました。したがって江戸初期には民衆の遍路が定着していたと考えられます。以前までは室町期の文明年間ぐらいから民衆が歩いていたという説がありましたが、愛媛大学の内田九州男先生がその根拠となっていた鰐口の銘文を丹念に調べた結果、そのようには読めないということを明確にされ、現在ではその説は否定されています。札所寺院の落書きによれば、16世紀、戦国末期には僧以外の者が廻っていたことがうかがえますが、民衆が大いに歩き始めるのは江戸時代からだと考えてよいと思います。

先ほどの真念の『四国辺路道指南』に記載されている内容から、当時すでに現在のお遍路に近い姿が出来上がっていることがわかります。この本の前書き部分に四国遍路を行うにあたっての注意が記されております。

一 用意の事 札はさみ板 長六寸 幅二寸 おもて書やう 年月日（梵字）奉納四国中辺路同行二人 うらかきやう（梵字）南無大師遍照金剛 国郡村 仮名印

右のごとくこしらえるなり。但し文箱にしてもよし。（伊予史談会編『四国遍路記集』より）
とあり、札を納めることがすでに江戸初期になされていたことが分かります。

さらに四国にわたるコースの道が記されています。

一 摂州大坂より阿州徳島へ渡海の時は、江戸堀阿波屋勘左衛門方にて渡り様次第、之を相尋ねるべし。白銀弐匁、徳島まで船賃、但海上三拾八里。

一 同所より讃岐丸亀へ渡海の時ハ、立壳掘丸亀屋又右衛門・同藤兵衛かたにて渡り様、之を相尋ねるべし。白銀弐匁、丸亀まで船賃、但海上五拾里。

□□□右は大坂より両所へ渡海の次第かくのごとくなり。但し他国よりハ其所々にて渡海の次第、相尋ねるべし。（伊予史談会編『四国遍路記集』より）

とあり、現在の旅行代理店のような店が江戸初期から大阪に出現していたことがわかります。「一 阿州靈山寺より札はじめハ大師御巡行の次第なり。」と、このころには1番札所が決まっていました。続いて「但十七番の井土寺より札はじめすれば勝手よし。」とあり、おそらく江戸初期以降の大坂と阿波を結ぶ航路は靈山寺のある鳴門よりも徳島が主流となっていたためと考えられます。

(2) 四国遍路と地域社会

私は四国遍路の歴史を学生たちにこのように説明したのち、次に四国遍路と地域社会というテーマで講義をすすめます。学生が地域文化を学ぶ点からも、とくに地域が四国遍路をどのように支えてきたのかということを重点的に説明します。

まず、鳴門教育大学教員の町田哲氏と徳島県中学校教諭で大学院に研修に来た井馬学氏の研究成果をもとに「庄屋文書にみる倒れ遍路への対応」について講義します。この研究を用いるのは、私たち教員が学生とともに明らかにしてきた成果をできるだけ受講する学生に伝えていくことが重要であると考えるためです。

地域の遍路への対応の一つに倒れ遍路の場合があります。倒れ遍路が出ますと、庄屋から郡代役所に

報告され、その後代官から組頭庄屋の方へ、その死が不審な死でないかを確かめる旨の命令がなされます。それを受けた組頭庄屋が現場で「死骸見分取糺」を行い、その結果を代官に報告するという経過になっています。その報告文書には遍路の出身地・所持品・服装・往来手形の有無と死に至る経緯など詳細に書かれています。なお、組頭庄屋とは庄屋のいくつかを束ねる大庄屋のことです。

鳴門教育大学には、組頭庄屋後藤家の文書10万点余りが所蔵されています。その中に遍路に関する文書が含まれています。この文書によれば、倒れ遍路には村が小屋掛けをし、食事を出します。病人に対しては村が看病や手当を行います。遍路を行う者の中には、郷里にいられなくなってしまった家族ごと生きるすべを求めて遍路に出る人たちもいます。子ども連れの遍路の場合、親から死ぬこともあります、残された子供はどうするのかということがあります。その時は阿波側の庄屋が、倒れた者の郷里の庄屋に問い合わせ、郷里の縁者や関係者に引き渡すことになっていたことがわかりました。時には、徳島まで引き取りに行くのは大変だから大坂で引き取りたいという場合もあります。そのような場合は大坂蔵屋敷を通じてそれを行います。

そしてもう一つ注目すべき点としてハンセン病者のことがあります。彼らの扱いは往来手形の有無で異なります。今まで表の遍路道と裏の遍路道があるといわれてきました。表遍路道というものは一般の方が歩いていて、そこを歩けないハンセン病者は裏の遍路道を歩いたと言われてきました。しかし、実際にハンセン病者の場合も一般的の遍路と同じように対応されています。往来手形があれば、つまりその身元がはっきりしていれば、一般と同じ様に扱われ、亡くなても供養さ

写真1 遍路病死并異死人見分糺控帳(天保2年)



(鳴門教育大学所蔵『後藤家文書』)

れます。さらに小屋掛けもされて、食事も出されています。このようなことは『後藤家文書』からわかつきました。(写真1)

これらの事例として、つやさんの場合を見ていきましょう。つやさんは47歳の女性で、備後国世羅郡の出身であります。娘であるさめ・しつ、同村出身のそめ・喜代吉親子の5人で歩いていました。5月28日に府中村、現在の徳島市国府にある悦太の家に泊まります。そうしたところ、つや・しつ、そめ・喜代吉が熱病にかかり、悦太が医者に見せ、薬・食べ物を与えていました。しかしその甲斐なく6月1日には娘しつと母つやが亡くなります。その後村役人が藩に届け、郡代が組頭庄屋後藤善助に死骸見分を命じます。後藤は往来手形の旨にしたがって、導師(僧)によって死骸を最寄りの墓所に土葬します。その後全く不審がないことを藩に報告しています。

次の事例を見てみましょう。これは但馬の国の七味郡の伊兵衛の妻の場合ですが、天保8年(1838)2月早瀬村の往還で、伊兵衛の妻(44歳か45歳)が倒れこと切れます。彼女は庄屋の見聞に「癪廟(病)相煩 面部相崩」とあり、ハンセン病者がありました。「往来手形」の旨に従って懇ろに土葬されます。ここでわかりますように、ハンセン病者は非常に嫌われて土葬などはされなかつたというのは誤りです。懇ろに葬られています。そしてその子供である半蔵(8歳)が残りました。半蔵に聞けば「兄が国元にいるので帰りたい」と泣き叫ぶばかりでした。そのため、村方が半蔵をさしあたり預かって養育し、郡代の下知を待ちました。おそらく国元の庄屋と交渉し国元へ送ることになったと思われます。こ

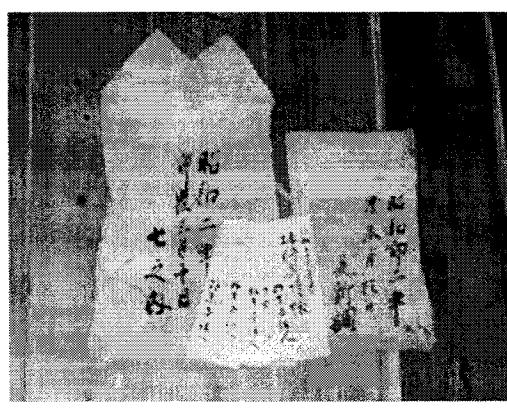
のように子供を送る費用、それまでの養育といった負担が村にかかってきていますし、おそらく藩からもそれに対する支援もあるうかと思われますが、このような非常に整ったお遍路を支える村の体制がでています。食べられなくなつた人が流れ着いて最後に遍路の中で死んでいく。重病にかかって遍路に来て死んでいく。そのような、遍路者の死に対応する行政的なシステムが、村の人々の力によって支えられて維持されてきたことがわかります。このような村の行政システムも広い意味でのお接待といえるでしょう。早渕村での倒れ遍路死者数を見てみると、天保8、9年には飢饉のためか17件、16件に達しています。それは村方にとっては大変な負担となるお接待であったと考えられます。

それともう一つ、四国遍路を支えた村の大師信仰についてであります。徳島県脇町中学校教諭で研修のために大学院に来た重本哲也氏が、脇町の大師堂・講を調査した研究があります。その研究によれば、美馬市脇町の大師堂の数は94宇あり、毎月大師講が実施されているのはその内36宇であります。大師堂といつても、村を守るために村境に大師像を置くだけの小さな大師堂から講衆が集会できるほどの規模の大きい大師堂まで多様であります。そのため大師堂を複数もつ村も存在します。

毎月20日に、大師堂か頭役の家かで大師講が実施され、その大師講の活動としましては、般若心経や十三仏の経を唱えるようです。十三仏会は追善菩提を目的とするものであります。昭和13年（1938）までは旧盆に大師踊りというものもあったということもわかっています。19講中では数珠くりといって、大きな数珠を回していくということも行われていました。さらにこの大師講がお接待や代参を行っています。

その一例として拝原東の大師堂の講中のお接待を見ていきます。昭和2年（1927）に新調された接待集金袋と5袋の接待袋（米用）が現在もあり、世話人がこの接待袋をもって、金銭やお米を集めました。そして昭和14年の「接待寄付人名帳」によれば、98名の名前が記されています。昭和4年（1929）の拝原東地区世帯数が109戸でありますから、ほとんどの世帯主からお接待の金品が集められ、それをもって接待に出かけていったことがわかります。昭和39年（1964）の「接待寄付人名帳」には73名の寄付者名が載せられ、「収入現金 参千九百七十円 白米二斗九升一合 参詣者多数あり、ひる過ぎお米終り、現金お賽銭で接待する」と記されています。昭和45年（1970）の「接待寄付人名帳」でも、「接待予定お米一盛に十円玉、三斗で三百人分」との記述から少なくとも300人分のお接待のお米と現金が用意され、講衆がお接待をしたことがわかります。この拝原東の大師堂にはお接待の幡、お接待の用具箱、大師堂に結ばれた納札、お接待袋と接待寄附帳といったものが現在でも残っています。脇町のように、阿波では大師信仰が拡がり、字ごとに大師講がつくられ、お接待などを通じて歩き遍路の方を支えていたとみられます。（写真2・3）

写真2・3 拝原東（脇町）の大師講のお接待（お接待の幡とお接待袋）



村人によるお接待は、倒れ遍路に対する行政的なお接待もあれば、字ごとの大師講による地域の宗教活動の一つとしてのお接待もあれば、また個人でお遍路さんを支援するためのお接待もありました。お接待も重層的に多様になされていたことがわかります。講演後に質問で指摘されましたが、当然、村が常にお遍路さんに対して温かいまなざしで迎えていたかといえばそうではありません。村が乞食遍路に対して追放するなど厳しい態度で接したことも事実であります。この救済と追放のなかに、お接待と村人の生活とのせめぎ合いの葛藤があつたことがわかります。

以上の研究成果は、私たち大学教員と学校現場から研修で派遣された院生等とともに地域の文化を掘り下げてきた結果であります、その成果を地域の子どもたちに教え、また学校現場でも活用してもらうことは、非常に大切なことだと思います。そのために私は、派遣された小・中・高の教員には可能な限り地域に密着した研究テーマを進めることにしています。

(3) 四国遍路の特徴

次に、四国遍路は、僧の修行の辺路を歴史的起点とし、民衆の遍路へと発展しました。私は、この僧の修行が起点であったことは、四国遍路の特質を規定する上で重要なことであったと思います。キリスト教の巡礼は、サンティアゴ巡礼が聖ヤコブによる救済を願うように、人とは隔絶した存在である神（キリストや使徒ヤコブのような聖者）によって救済されるところに特徴があります。それに対して四国遍路の場合は、僧が厳しい修行の中で、悟りを得るために巡礼しているのであって、隔絶した力によって救済されるのではない。自らの中にある仏性を磨いて、煩惱をなくし、そして悟りの境地に達していくのであります。そう考えますと、人によってその長さも違いますし、一周廻ったとしても煩惱が除かれないのであります。

したがって、四国遍路は、サンティアゴ巡礼のように聖ヤコブが祀られる場所を目指す単線的な巡礼ではなく、周回の形態をとることになったと考えます。四国遍路が、僧の修行の辺路としての特徴は、民衆の遍路へと大きく変化した後も、変わらず生き続けることになったのです。このように、同じ巡礼と呼ばれますと、ヨーロッパの隔絶した絶対的な存在（キリストや使徒）による救済を求める巡礼と、自らの修行（歩きも含めて）を通じての自力の救済を基本とする四国遍路とでは、巡礼の在り方が異なるのです。

次に、四国遍路のもう一つの特徴についてであります。前述したように、八十八ヶ所の札所寺院は弘法大師ゆかりの寺院とされますが、そのほとんどがのちに創建されたものであります。寺院以外にも、仏像・堂舎・巨木・湧き水など弘法大師ゆかりのものとされる事物は多くありますが、これも後世の人によってそのようにつくられてきたものであります。

第11番札所藤井寺から第12番札所焼山寺の遍路転がし途中に柳水庵という湧き水のあるところがあります。以前そこの水が止まってしまい、大半の遍路はそこで水を汲むことができず困ってしまうことがありました。ちょうど学生の歩き遍路体験授業を実施していたために、用意していたペットボトルをお接待として一般の人にもお渡しすることができました。この遍路道は、吉野川流域と神山とを結ぶ山越えの道であり、以前までは重要な道であったと思われます。その途中の柳水庵の湧き水は往来をする人にとって非常に貴重な水飲み場であります。だからこそ弘法大師が湧かした水と価値付けられたのであります。このように、弘法大師ゆかりの事物は、後世の人が価値付けて活用し、現代にまで伝えてきたものであります。

したがって、四国遍路の文化は、空海一人によって創られてきたものではなく、長い歴史のなかで人々の知恵が育んできた壮大な文化であると言えます。それを受けた受講生に、四国遍路の文化をいかに活用し、後世に伝えていくかという課題を投げかけることにしています。

3 遍路の基礎的学習（歩き遍路体験授業）

講義を5コマから6コマした後、2泊3日の歩き遍路体験を実施します。学生は、遍路を廻る人との交流、お接待などを通じての地域の人々との交流のなかで学ぶ。また、遍路道や札所寺院に点在する文化財や自然などからも学ぶ。とりわけ本授業では地域の人々との交流から学ぶことに重点を置いています。それは道々で受けるお接待も重要な要素ではありますが、晩の宿舎での地域の人々（自治体職員・ボランティア等）による講話の時間を設けています。地域の人々がどんな思いで遍路道を支えているのか、またどのような活動をしているのかを学びます。（写真4・5・6）

前述しました柳水庵の水が止まった際に、私どもは神山町教育委員会の担当課に伝えに行ったのですが、教育委員会の担当の人はその近くの集落に電話をかけて対応しました。その集落の人が柳水庵一帯の遍路道を維持しているのです。以前に一本杉を囲っている石垣が崩れたことがありました。その時も神山町教育委員会から直ちにその立て直しの依頼が近くの松尾集落に連絡されました。遍路道は、このように道々の集落の人々によって支えられています。集落の人々の理解と情熱なくして遍路道の維持もおぼつかないのが実情であります。このような地域の人々の活動を現地で直接聴くことは、大学キャンパスでの授業ではなかなかできません。地域での学習は、学生が地域文化を学ぶ上で効果的であります。

また、その講演テーマは遍路の話だけに限るものではなく、ひろく地域の人々の活動を聞く場としても活用しています。人々の思いや活動を学ぶことは、将来教員となって地域社会を支える学生にとって貴重な体験となるからです。その事例として廃校となった勝浦町の坂本小学校の話をあります。徳島では廃校が進み、地域社会の大きな課題の一つとなっています。坂本小学校では廃校になった後、地域の方が協力してその廃校を宿泊所に変え、来られたお客様の人数に合わせて、出向いて料理等の世話をすするという村おこしをしています。ちょうど第20番札所鶴林寺に登る前夜にこのような講演会を持ちました。

写真4 学生の歩き遍路体験授業



写真5 地域の人との交流



写真6 地域の人からの講話（宿坊安楽寺）



このように、大学の授業に地域社会が培ってきた教養を組み合わせた新たな授業づくりを進めています。なお、問題点もありました。本学は国立大学であるために歩き遍路授業の際に、宗教的な色彩を出すことは非常に難しくなっています。それと言いますのも、1回目の歩き遍路体験授業後のレポートで学生から抗議がありました。そのときの授業では、すべて本堂と大師堂で般若心経を納経しました。学生の抗議を受けて授業担当の教員間で検討し、授業はみんなが受講できる体制で実施しなくてはならないという判断から、現在では読むか読まないかは受講生個人の自由にしております。

歩き遍路体験授業の後には、いくつかの課題を出します。基本はレポートであります。それ以外に、地理学の教員からは地形図の読み方についての課題が課せられます。また心理学の教員からは自らの歩き遍路体験を題材にした俳句の作品づくりが求められます。俳句は、学生が遍路の中で内省していく点において有効であります。

4 学生のボランティア活動（創造・活用・発信）

講義と歩き遍路体験を合わせた授業を受講した学生は、どうのように地域社会に貢献していくのか。一つは遍路文化の掘り起こし活動であり、遍路札所寺院の文化財調査や遍路道に点在する石造物の調査などです。最近では世界文化遺産の登録を目指して、四国各県が遍路に関する文化財を調査しており、徳島県の場合は、徳島県教育委員会と鳴門教育大学とが協働してすすめています。鳴門教育大学では町田哲教員を中心に、24カ寺の札所寺院文書の基礎調査を行いました。今年も学生とともに泊まり込みで太龍寺・鶴林寺の重点的調査を行っています。学生は調査の方法を実践的に学び、遍路寺院や石造物の文化財の調査の成果から遍路文化をより深く理解することができます。（写真7・8）

写真7 札所寺院での文化財調査（太龍寺）



写真8 遍路道の文化財調査



さらに一般市民対象の歩き遍路において、学生が自ら調べた道しるべや文化財を市民に向けて解説することも行っています。自分たちが調べたものを一般の人々に分かり易く説明することは、将来教員を目指す学生にとって良い経験となります。（写真9）

また、学生は地域の熟年層の方々からの聞き取り調査に積極的に参加しました。神山町での聞き取り調査では、10人余りの熟年の方に集まっていただき、その方たちの若いころの遍路はどのようなものだったの

写真9 学生による市民への文化財説明



か、また村の生活はどのようなものであったのかなどの聞き取り調査を行いました。その話の中には、年頃になると仲良しメンバーの男女が連れだって泊まりを兼ねた遍路に出かけたり、また遍路道で恋を語らったりといったような裏話も聞くことができました。そのほかにも神社での祭りの様子など聞き取り調査をして記録として残さなければわからなくなってしまうことは多く、聞き取り調査の重要性を痛感しました。

(写真10)

写真10 地域の人々からの聞き取り調査(神山町)

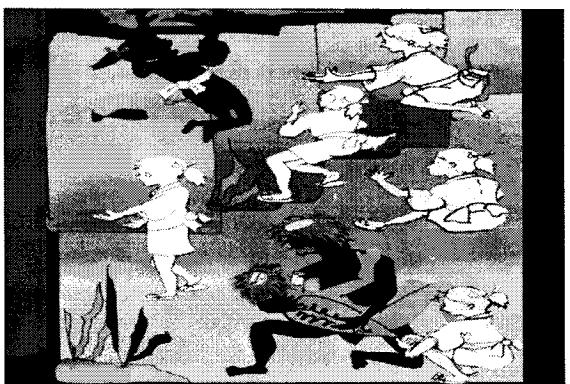


神山町で一般の方100名くらいに集まっていたいただき、学生を中心にそれまでの活動成果の報告会を開催しました。また徳島県立博物館と連携して特別展の展覧会を開催し、学芸員と本学教員とが共同で説明会を実施しました。芸術系の先生は学生を中心に、民話を題材にした影絵を作成し、それに音楽とせりふをつけて30分くらいの劇を作りました。学生が地域の伝承を題材にして絵本も創作しました。学生が専門性を發揮してその成果を発信していく活動を行っています。(写真11・12)

写真11 学生による市民向けの成果報告会(神山町)



写真12 民話を題材にした影絵と音楽劇の創作



本学は教育大学でありますので、学生がボランティアとしてサポートする小中学生・高校生対象の歩き遍路体験を行っています。子どもたちは、集団行動を通じて成長し、自然の美しさに感動し、苦しい時のお接待に感謝し、遍路文化を体験的に理解していきます。また、ボランティア学生は子どもたちをサポートすることで教員としての力量を身につけていきます。このように実践的な教育活動を展開しています。

(写真13)

子どもの歩き遍路体験を実施するにあたって、まずそのプランニングを行います。どのような歩き方をするのかということを話し合います。それが決まりますと、保護者を集めて事前説明会を行います。こうして保護者の了解を得て歩き遍路を行います。歩き遍路では子どもたちと学生たちがグループとなって歩き、弘法大師ゆかりとされる柳水庵の水飲み場でも、学生ボランティアが写真のようにサポートします。また歩いている人と交流して学ぶ場面も見られ

写真13 子ども2泊3日歩き遍路体験(御蔵洞)



(鳴門教育大学 教育と学校を考える会)

ます。実施した後には反省会を実施しサポートが適切であったか、子どもにとって歩き遍路体験がどのような意義があったのかを検討します。また遍路中も1日の行程が終わった際に学生と反省会をもつ場合もあります。（写真14・15）

特に印象に残った話としましては、「鳴門教育大学 教育と学校を考える会」が実施している2泊3日の子ども歩き遍路体験で、この歩き遍路は、いつも6チーム程度に分けて歩くことになっています。一つのチームは、小学1、2年から高学6年生や中学1、2年生までの子どもがバラバラで構成されていて、そこにボランティアの学生が2人入ります。時には教員が入ることもあります。ある時1チームを除いて他の子どもたちがすべて目的地まで歩けなかつたことがありました。その晩の反省会で、本来ならば歩けなければならぬ距離をなぜ子どもたちは歩くことができなかつたのか、なぜ1チームだけ歩けたのかということを検証しました。そうしたところ、歩けた1チームには小学校教員がボランティアに入っており、前もって歩く行程とその周辺の様子の下調べをして子供たちに「このペースで歩いているとここまでしか歩けないよ」とはっきり伝え、子どもたちに判断させました。

そうすると子どもたちもこのままではいけないということで子どもたちなりに考えてペース配分をするようになります。それ以外のチームは学生サポーターが単に「歩け、歩け」と急かしたというだけでした。それでは子どもたちはどのように歩いていいのか分からぬのです。将来教員を目指す学生は、まず下見の時に詳細にチェックしておくこと、そして子供たちに状況を明確に伝えて考えさせることなど子どもと接する上で大切なことを学ぶことができました。

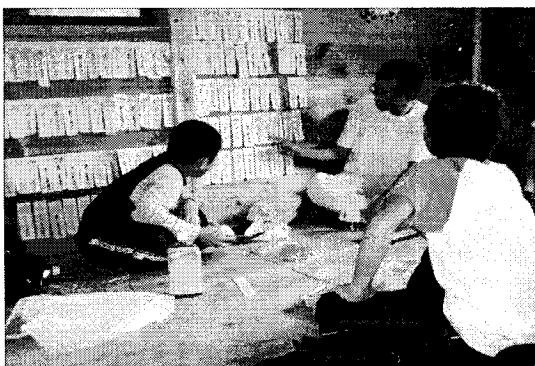
小学低学年でも一番よく歩いた時は1日25キロくらい歩きます。ただそのような距離を歩けるかどうかは横にいるボランティア学生の声掛けによって変わります。これは教師力ですね。また子どもたちも考えています。しりとりをしながら歩いている集団がありました。リーダーの小学6年生に、なぜしりとりを始めたのかを聞きますと、「しりとりはしんどさを忘れさせてくれるし、しりとりをしていれば声が聞こえないといけないからバラバラにならないのや。僕が考えたんやで」という答えが返ってきました。このように子どもがチームとして歩くためにいろいろ考えて対応していることは非常に興味深いことです。

また、出発の寺と最終目的地の寺を決めておいて、お金を与えて自由に歩かせるという子ども歩き遍路も実施しました。チームごとに好きな所に行くことができます。あるチームがどこでお金を使うか子ども間で意見が分かれてしまい、前日に決まらず、ボランティア学生の提案で翌日歩きながら決めようということになりました。当日歩いて弥谷寺まできたときに、リーダーの子どもが、このように努力して弥谷寺を登ったのだから、このお寺で記念のものを買おうと提案し、みんなの意見が一致しました。いろいろな意見が出たのですが、子供たち自身のコミュニケーションで意見がまとまりました。2

写真14 子どもと学生ボランティア
(柳水庵の水飲み場)



写真15 地域の人から学ぶ子どもたち



泊3日も歩いているうちに信頼関係が生まれてくるのですね。

このように子供たちも成長しますが、それをサポートしている学生たちも成長します。遍路という地域を活かした教育活動を行っています。

おわりに

遍路は活用されないと遍路文化そのものが消滅していきます。地域においても遍路が活かされることが大切であると考えます。教育に携わる私たちは、遍路という場を活用した教育活動を実施しています。そこで学生たちは遍路文化、地域社会に触れ、それを学び、地域の人々と協働しながら、その文化や社会を創造的に継承していく力を育みます。子どもまた学びます。とくに年長が年少の荷物まで持つて山道を登る姿から、お互いに助けながら協働する力が養われていることが窺われます。遍路文化を活用した地域人間力の育成をめざし、学生は四国遍路の講義・歩き遍路体験授業によって遍路文化の基礎的な理解を得ます。それは大学だけではなく、遍路の方々や地域の人々、さらに文化財や自然など、あらゆるものを通じて学んでいきます。その後、専門科目で習得した知識・技能を用いて、文化財等の調査研究活動や、子ども歩き遍路体験活動、作品の制作など、地域の人々と協働して、地域文化を活用し創造していくのであります。そしてその成果を社会に発信します。

最後に、若い人に最近伝えたいことは、地域が衰退してきていることです。柳水庵や一本杉の話で登場した神山町も今回の調査で12パーセントの人口が流出しています。そして町を出る人はみんな若い人ばかりで、その結果地域の高齢化が進んでいます。とくに山村集落はもはや存続が限界であるともといわれていて、そのため道そのものも維持できなくなっています。

したがって、遍路文化等の地域文化の継承はそう容易なことではありません。文化を支えるということはそこ人が生活してはじめて可能となります。それは住む人が減少し、小学校が廃校になって運動会等がなくなることが、学校の問題に留まらずその地域の行事がなくなることを意味し、地域のそのものの活力が喪失していくことになります。そのような観点から地域をどのように支えるべきか大きな課題があります。どのようにすれば解決できるか直ちに回答が出るものではないですが、私どもは多くの四国の教員を送り出す立場から、学生たちにこの問題について常に語りかけていきたいと考えています。地域の文化や社会を支えることができる人を育むために、遍路文化を活かした教育活動をおこなっています。



大石雅章氏講演1



大石雅章氏講演2